

古橋まどか / FURUHASHI Madoka

彫刻、写真、インスタレーション、2017年度(1年研修)メキシコ/オアハカ、メキシコシティ

メキシコ南部オアハカ州の石工と、煉瓦職人と研修に際して制作したインスタレーションを構成するのは、採掘の後、加工を経て、本来ならば建築資材となる石と土。過程にあって、石は切削痕を残している。土は未焼成のまま、型にした作業着のウエストゴムやインシームが、古生物のような特徴を与えている。それに人工の汗なるものも含ませた。

採掘、製造の現場を訪ねるようになって久しくあった。それでも、鉱山の途方もない広がりには、いつもながらの恐れを覚えていたと記憶している。その恐れは、坑の深さ、地層の重なりといったことにも感じた。私がたたずむこの地点は、堆積しつづける時間の自然史上の一点にすぎない。そこに産業活動も集中している。

コロナ期を愛知で、あらたに庭仕事を日課として過ごしてきた。日々、なんらかの季節の兆し、変化が、いずれかの植物に訪れて、はげしく打ち付けるような豪雨もときおり降った。進行性の病によって家族を失う経験もした。埋めた貝殻は、いつまでも土に還らず残る。土のみでつくられたはずの鉢のかけらもなかなか分解されない。これは煮炊、あるいは焼成がそうさせるらしい。火葬した骨も残存し続ける。《焚く、枯ぶ、渡る》はこのあたりを出発点としている。

庭土の造形物は、はじめ私の体重に等しい。乾燥の後、枯草で野焼きをするつもりで、実現すれば焼物となる。干潟に飛来する鳥の映像と集めた流木を並べた制作は、旅立つ人の無事を祈り、生き絶えた鳥の供養として焚く「雁風呂」から着想を得た。CTからレーザー焼結なるプロセスで三次元プリントした骨の断片などもある。それらに、冬の休眠を終えて、そろそろ芽吹き始める枝葉を添えようと思う。私なりのとむらいとして。

1983年長野県生まれ。

英国AAスクールで建築を学び、ロイヤル・カレッジ・オブ・アート大学院芸術学科修士課程を修了。現在、愛知県を拠点に活動。有形である物、無形の身体、エネルギー、労働などをリサーチの主題とし、滞在制作を基軸に活動。地域、場所、時間特性を反映する彫刻、インスタレーション、空間表現を手掛ける。www.madokafuruhashi.com

主な近年の展覧会に、個展「ナンセンス、無体物、ストの状況」板室温泉大黒屋、栃木(2019)、「Narratives of Exchange / Exchange of Narratives」アルノス財団、メキシコ・シティ、メキシコ(2018)、個展「Body Object Thing Matter」Yutaka Kikutake Gallery、東京(2018)、個展「Raw Material, Goods and Human Body」iCAN、ジョグジャカルタ、インドネシア(2017)、個展「Il Quarto Stato」クストハレ・プレーシャ、プレーシャ、イタリア(2015)など。受賞歴に、第8回資生堂アートエッグ賞ノミネート(2013)。

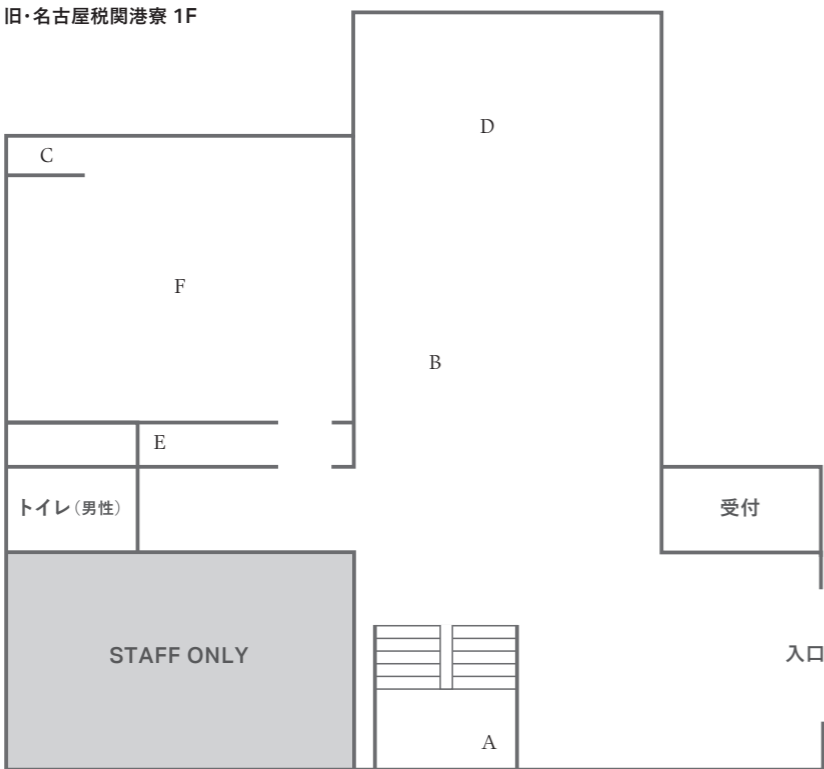
焚く、枯ぶ、渡る
2022

A | HD Video
B | 樹脂、リングラフ印刷
C | 草花
D | 流木(藤前)、HD Video
E | HD Video
F | 庭土(部分焼成)、枯草、枝、木炭

3Dプリント制作 |
株式会社J・3D

協力 |
愛知県陶磁美術館
名古屋市野鳥観察館
名古屋植物防疫所
when press

大田黒衣美
佐原五大
滝澤 麟
中河原徹也
Michali Baror
古橋市男
益山詠夢
本原令子
森下 誠
横内賢太郎



DOMANI plus @ 愛知

まなざしのありか *Where the gaze resides*

DOMANI plus @Aichi



港まち会場 2022/1/18^火—3/12^土 長島有里枝 古橋まどか

Minatomachi venue January 18 – March 12, 2022 NAGASHIMA Yurie FURUHASHI Madoka

会場 | 港まちポットラックビル、旧・名古屋税関港察

Venue | Minatomachi POTLUCK BUILDING, Former Minato Dormitory of Nagoya Custom

「DOMANI・明日展」は、文化庁新進芸術家海外研修制度〈在研〉の成果発表展として、1998年から毎年東京で開催されてきました。第24回を迎える今年度は、従来から実現の機会を探ってきた地域展開に挑み、全国5会場(水戸、京都、広島、愛知、石巻)で行うこととなりました。このうち、「DOMANI plus」は、2015年以降、地方会場やオンライン等で展開してきました「DOMANI・明日展 plus」シリーズを踏襲した中・小規模の企画展です。

愛知会場では「DOMANI plus @愛知」として、愛知芸術文化センター、港まちを会場に、愛知県を拠点にするアーティストを含む、4名のアーティストによる展示を行います。これまで愛知県内では、愛知芸術文化センターや名古屋港エリアをはじめ、さまざまな地域で展覧会や芸術祭が数多く開催され、都市と芸術が密接な関係性を持ちながら、同時代の表現活動が盛んに行われてきました。

今回、愛知芸術文化センター会場では色彩や形、港まち会場では家族や記憶、時間などをキーワードに、それぞれのアーティストが見つめる「まなざしのありか」とその先に映し出される存在に出会う場を創出します。

港まち会場

貿易を中心にさまざまな場所から人やものが行き交ってきた港まち。今から100年ほど前に埋め立てによって作られたこの場所は、人びとが日々の暮しを重ねて来た場所でもあります。

港まち会場では、これまでフェミニズム的な問題をテーマに創作に取り組んできた長島有里枝と、形ある物にはじまり、近年では形のないエネルギーとしての労働や身体に関心を持ち制作する古橋まどかの作品を展示します。長島は自身の母親と、また自身のパートナーの母親と共同で制作したタープとテント、その制作過程で撮影した写真によって会場を構成。古橋はコロナ禍の愛知にて経験した家族の死、あらたな日課となった庭づくりに加え、瀬戸の鉱山への来訪などを経て、港まちでの滞在制作(「MAT, Nagoya Studio Project vol.7」)によって、自然史の延長に身体をとらえる新作を発表。

2人のアーティストの作品を通して、時代という言葉では語りきれない個人史を軸にした視点とその対象を見つめます。

「DOMANI plus @愛知 | まなざしのありか」にご来場いただきありがとうございます。

右のQRコードからアンケートにご協力ください。(Googleフォームに繋がります。)



主催 | 文化庁、国際芸術祭「あいち」組織委員会、港まちづくり協議会

企画 | 国際芸術祭「あいち」組織委員会(塩津青夏)、Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya](青田真也、吉田有里)

協力 | 愛知県防水工事業協会、アッセンブリッジ・ナゴヤ実行委員会、KENJI TAKI GALLERY、MAHO KUBOTA GALLERY、Yutaka Kikutake Gallery、Yumiko Chiba Associates

制作協力 | アート・ベンチャー・オフィス ショウ

施工 | ミラクルファクトリー(青木一将、高橋和宏) デザイン | 川村格夫



「DOMANI・明日展」は、文化庁が半世紀以上にわたり継続してきた「新進芸術家海外研修制度〈在研〉」の成果発表の機会として、1998年以降、おもに東京で開催してきたアニュアル展です。24回目の今年度は、水戸・京都・広島・愛知・石巻の全国5会場で行います。



文化庁委託事業「令和3年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

港まちづくり協議会
JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN



domani-ten.com www.mat-nagoya.jp

長島有里枝 / NAGASHIMA Yurie

写真、1998年度(1年研修) アメリカ/カリフォルニア

研修先だったアメリカでは、家族で初めて大学に行く子供たちがファースト・ジェネレーションと呼ばれ、大学進学に経済的・精神的なサポートが必要なグループだとみなされている。彼らは、卒業まで学業を継続することが困難だったり、特権階級がマジョリティである大学コミュニティで孤立したりしがちだと言われる。わたしの両親にも学費を払う力だけでなく、進学に必要な物理的・精神的サポートの知識もなかった。文化庁の制度がなかったら、自分はいまのような作家にも、貰ったチャンスの成果を社会に還元したいと考える大人にもなれなかったかもしれない。

東京で母と制作したテントと、神戸でパートナーのお母さんと制作したタープを、新幹線だとおよその中間地点になる名古屋で出会わせる。別の人生を、違う場所で生きてきた彼女たちは奇遇にも、家庭を持つことと引き換えに、パリでお針子になる夢を諦めたという共通点を持つ。ある人たちは留学することができ、他の人たちにはできない。そこには努力や能力のような個人の力よりずっと大きな、社会の不均衡を生み出す力——性別、人種、階級などを理由としたあらゆる搾取や差別とかネオリベラリズム的な考えかた——が作用している。表面的な美しさに惑わされることなく、美に深くコミットする表現を追求したい。

1973年東京都生まれ。

カリフォルニア芸術大学ファインアート科写真専攻修士課程修了。武蔵大学人文科学研究科博士前期課程修了。現在、東京都を拠点に活動。社会で周縁化されがちな人びとや事象に、フェミニズムの視座から注目した作品を多く制作している。近年は写真だけでなく立体作品、映像、文章の執筆など、表現ジャンルを超えた活動を行っている。yurienagashima.com

主な近年の展覧会に、「長島有里枝×竹村京 まえといま」群馬県立近代美術館(2019)、個展「知らない言葉の花の名前 記憶にない風景 わたしの指には読めない本」横浜市民ギャラリーあざみ野、神奈川(2018)、個展「そしてひとつまみの皮肉と、愛を少々。」東京都写真美術館(2017)など。出版歴に、『「僕ら」の「女の子写真」からわたしたちのガーリーフォトへ』大福書林(2020)、『Self-Portraits』Dashwood Books(2020)など。受賞歴に、第36回東川賞 国内作家賞、北海道(2020)など。ゲストキュレーターとして企画した展覧会「ぎこちない会話への対応策—第三波フェミニズムの視点で」金沢21世紀美術館、石川(2021)が開催中。

縫うこと、着ること、語ること。		
1 無題 (kobe) 2016 ミクストメディア (ワンピース、シャツ、他) 約600.0×700.0cm 制作協力 渡辺津喜美	7 発表会のドレス 2016 C-print 102.7×130.0cm	13 手づくりのコート 2016 C-print 43.5×35.7cm
2 友達のジャージ 2016 C-print 103.1×130.0cm	8 姉妹と姉妹 2016 C-print 35.6×43.4cm	14 バイト代で買ったシャツ 2016 C-print 25.3×30.5cm
3 入院中のパジャマ 2016 C-print 50.8×61.0cm	9 ダンスチームの衣装 2016 C-print 127.0×90.3cm	15 娘のサロベツ 2016 C-print 25.3×30.5cm
4 ヴィンテージのリーバイス 2016 C-print 50.8×61.0cm	10 バーバリーとシビラのジャケット 2016 C-print 61.0×50.8cm	16 もうすぐ母 2016 C-print 30.4×25.3cm
5 母のドレス 2016 C-print 25.3×30.5cm	11 息子の柄シャツ 2016 C-print 35.7×43.4cm	17 母と息子 2016 C-print 40.5×50.8cm
6 叔母のフランス製コート 2016 C-print 25.3×30.3cm	12 アメリカの勝負下着 2016 C-print 102.5×130.0cm	18 Shelter for our secrets 2016 ミクストメディア (刺繍、Tシャツ、コットンバッグ、他) 約Φ275×200cm 制作協力 長島ひろみ
		23 Tight shorts (about home) 2015 ゼラチンシルバープリント 35.5×27.9cm
		24 Today's pancake 2020 C-print 50.8×75.3cm
		25 Prince tights (about home) 2015 ゼラチンシルバープリント 35.6×43.0cm
		26 Don't make that face 2015 C-print 27.9×35.5cm
		20 Punk in red 2015 C-print 25.3×20.3cm
		21 Sleeping hand 2010 ゼラチンシルバープリント 50.5×60.6cm
		22 Self-portrait 2015 C-print 27.9×35.5cm
		23 Tight shorts (about home) 2015 ゼラチンシルバープリント 35.5×27.9cm
		24 Today's pancake 2020 C-print 50.8×75.3cm
		25 Prince tights (about home) 2015 ゼラチンシルバープリント 35.6×43.0cm
		26 Don't make that face 2015 C-print 27.9×35.5cm
		27 Collaboration with Naoko Yamamoto 2016 C-print 102.5×130.0cm 協力 佐藤真理、デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO)

港まちポットラックビル 3F

